

植林・地球緑化推進セミナー 報告書

明治神宮の森 記念講演会

神宮の森から「大いなる命」にめざめよう！ -

主催：NPO 法人 地球緑化推進機構

& NPO 法人 免疫療法懇談会

特別協力：明治神宮

平成19年12月25日

平成19年6月8日に、内閣府による認証を受けて設立されたNPO法人 地球緑化推進機構は、生命の源である植物の力を借りて人類の未来を確保するため、森林を再生する植林を中心とした様々な活動を始めたNPO法人であり、この度、地球温暖化対策が人類に差し迫った課題となっている今、地球温暖化の原因となっている二酸化炭素を固定化するには、最も有効な植物の持つ光合成の力を借りて、植林等の緑化を通じて、人類の未来を確保すべく、NPO法人 免疫療法懇談会の共催と明治神宮の特別協力を得て、さる平成19年9月17日(月)12:30~17:00、明治神宮の森の中の明治神宮会館におきまして、下記のような 植林・地球緑化推進セミナー を実施致しました。以下は、その報告書であります。

記

日時 : 平成19年9月17日(月) 12:30~17:00

会場 : 明治神宮会館 (明治神宮の森の中にある、1900名収容可能な大会場)

講演プログラム :

明治神宮制作フィルム 特別上映 「明治神宮の歳時記」

第 部 地球のチカラ

序言 「地球緑化と温暖化対策」
NPO法人 地球緑化推進機構 理事長 佐宗 邦夫

基調講演 「鎮守の森」が地球を救う
横浜国立大学名誉教授・植物生態学者 宮脇 昭

第 部 命のチカラ

講演2 鎮守の杜でセロトニン神経を鍛えよう
東邦大学医学部教授・医師 有田秀穂

講演3 がんワクチン -自然治癒力をやさしく引き出す-
米国蓮見国際研究財団理事長 蓮見賢一郎

終言 「悠久の大宇宙の波濤としてのわれら」
NPO 免疫療法懇談会 理事長 酒生文弥

(司会挨拶)

NPO法人 地球緑化推進機構としては、本年6月8日に内閣府によるNPOの認証で正式に発足設立されてからお披露目の初めての講演会であり、またNPO 免疫療法懇談会としては、第8回目の節目にあたる催しで、両団体のコラボレーションにより開催されるに到った、「鎮守の森」という植林が生み出した貴重な植物の齎す「いのちの森」の、地球の「環境」と人の「健康」に及ぼす効果をテーマとするこのような雄大なテーマを追求する試みであります。このような企画の背景に対しては、中央官庁の農林水産省・国土交通省や地方自治体の東京都環境局や渋谷区・目黒区・杉並区や東京商工会議所のご後援に加えて、明治神宮の特別協力を得て、この明治神宮会館で開催させていただき、ご後援を賜りました団体には、心よりの感謝を申し上げます。

(来賓挨拶)

前衆議院議員・参議院議員 長浜 博之

民主党で、長らく環境政策を担当していたことから、この「神宮の森から大いなる命に目覚めよう！」という素晴らしいフォーラムにお招き戴き、誠にありがとうございます。緑豊かな環境と人間の健康問題というのは、日本が貢献できる役割のある世界に誇れるテーマであり、生まれも育ちも東京の墨田川の近くである私は、隅田川の汚染による自然環境の悪化が及ぼしたひどいアレルギーの花粉症にも悩んで来た自身の経験からもその重要性は認識しており、政策とか法律とかの規制と共に、こうしたフォーラムの場での「環境と健康」の問題を改めて取り上げてゆくことにより、一人びとりの自覚と認識を促してゆくことにより果たしてゆくべき役割が重要で、地球を構成する人類として、今回のフォーラムは日本や地球の環境と健康の問題を認識して戴くいい機会となり、これからもしっかりと意見交換をしていながら、ともに素晴らしい日本国や地球に戻してゆきたいと申し上げて、ご参集下さりました皆様に感謝申し上げ、ご挨拶に代えさせて戴きたい。

講演プログラム :

(主催者挨拶)

序言 「 地球緑化 と 温暖化対策 」

NPO法人 地球緑化推進機構 理事長 佐宗 邦夫

2007年6月8日に内閣府の認証を戴いたNPO法人 地球緑化推進機構とは、深刻な地球温暖化の危機に対して、一般市民の立場で正面からこれに立ち向かうために様々な活動を行なおうとの趣旨で設立されたばかりの団体であり、今回はそのお披露目もかねて、地球温暖化の原因である増え続ける二酸化炭素の固定化には最も有効な、植物の持つ炭酸同化作用である「緑化」を推進する最良の手段としての「植林の重要性」に着目して、「鎮守の

森」が持つ有効性と重要性について、世界的に著名な植物生態学者の横浜国立大学 宮脇 昭 名誉教授にお願い致しまして、基調講演を賜わることと致しました。明治神宮のご協力を賜わり、講演会に先立ち午前10時半からは明治神宮の環境団体であるNPO法人 響 にご案内戴き、「グリーンウォーク」という散策により、新鮮なる巨木の酸素を十分に味わわせて戴きながら、この鬱蒼とした明治・大正期の人工植林の「明治神宮の森」について学ばせて戴く機会を賜りました。明治神宮の森は、約100年前に、全国の10万人からの寄付によって集められ植林されました10万本の苗木の植林で作った人工植林地です。こうした日本の植林文化というのは、世界に誇るべき文化・文明であり、これを世界に広げていけば、二酸化炭素固定化の問題は解決してゆき地球温暖化の危機も軽減してゆく筈であります。また、科学技術の発展により空気を遠心分離機にかけて二酸化炭素を液化して空気中から除去する機械装置の実用化の試みもなされて、試作品も創られているやに聞いております。そういう物が現実化するまでは、植物の炭酸同化作用が最も有効な二酸化炭素固定化の手段であり、この植物の本来有する機能を活用する他ありません。NASAのジェームズ・ハンセンという博士の警告によれば、あと10年で2度Cの平均気温の上昇で、人類が何もしなければ「人類は絶滅の危機に到る」とのことで、いわば「絶滅危惧種の人類」という自覚が、我々には必要であるというじょとで、なし得るありとあらゆる手段で、地球温暖化を阻止する活動をやらねばない事態に立ち到っております。是非、その趣旨にご賛同いただける方々には、お助力を賜わりたくお願い申し上げ、共に努力して参りましょう。

第 部 地球のチカラ

基調講演 「 鎮守の森 」 が地球を救う！

横浜国立大学名誉教授・植物生態学者 宮脇 昭 氏

(講師略歴) 1928 年生まれ。財団法人地球環境戦略研究機関 国際生態学センター長。著書に日本全土の植生をまとめた『日本植生誌(10巻)』『植物と人間』『人類最後の日』『緑の証言』『木を植えよ!』『いのちを守るドングリの森』『鎮守の森』など多数。70年毎日出版文化賞、91年朝日賞、92年紫綬褒章、2000年勲二等瑞宝章、2006年11月日本人初のブループラネット賞など受賞歴多数。

(講演内容) ただいま、NPO法人 地球緑化推進機構 佐宗邦夫 理事長からお話がありましたとおり、今、日本は、また人類は、かつて夢見たこれ程まで物の豊かな生活を享受しながら、極めて厳しい自然や、心の遺伝子の問題の時代を迎えていながら、人類は「命」を「30数億年続いてきた遺伝子」を未来にいかにつけてゆけるのかという課題に直面しております。

今日は、私が今まで、58年間明治神宮を初めとする日本各地や世界各地38か国で現場で、どのように地球の緑がなって、緑を享受し、都市を造り、文明が発達して都市が衰退し、森を切り倒して文明は滅び廃墟の中で暮らしていったかという歴史の経過を、メソポタミアもエジプトもギリシアやローマ帝国が辿ったいった栄え滅んでいった過去の例に照らし合わせながら、4000年来日本列島に住みついてきた日本民族のあり方とは、島国である時に襲う台風や地震や津波におののきながら、焼畑をして、水田を耕しながら、都市も作ってきたが、日本中のすべての森に社を建てて、その土地本来の故郷の木々によって日本人は長い間守り育ててきたのが故郷の「鎮守の森」であります。日本中に、この1000年続く「心と命の森」を「鎮守の森」として守り育てて、そのもたらす現代的な動態環境保全・地域景観から習俗にいたる、本物の森を、市民と共にNPO・各種団体・企業や行政を統括して、我々が、1000年はおろか次の氷河期にいたるまで続く9000年も残るような万年続く「鎮守の森」を、この東京から今すぐに木を植えて、世界に向けて21世紀の「鎮守の森」を共に作って行きたいと思えます。今日は、「鎮守の森」が世界を救う！というテーマで、お話をさせていただきます。神宮の森が最期に本格的に近代化された日本の都市の中で創った森であること、人々が植林によって造り長い間守り育ててきた「鎮守の森」であります。今日は、少し早めに来て、あらためてこの神宮の森を眼で見て、手で触れながら、思案させていただきました。本当に、この東京砂漠の中で唯一のオアシスとしてのこの神宮の森は、かつては練兵場として使用されていた中で、当時、先人達の先見性のある判断で、帝都としての整備が図られ、植林されたものであります。その植生については、亜硫酸ガスに敏感な松・杉・檜などの針葉樹は危ないというので、当時の日本領土であった樺太も台湾も朝鮮半島からも含めて、全国から13万本とも言われた苗木が献木としての寄付として集められ、土地本来の東京都の「いのちの森」の主役である「椎の木」や「欒の木」は、小さくてもやがて大きくなった時の為にいい場所に、また楠木等も植林したというように、やがてそれが、50周年記念の時には3年間、明治神宮からの依頼で現地調査をさせて戴き、私共で文部省に出した現地調査報告書の通り、もう50年経ったなら少なく共、楠の木の下には「その土地本来の」大きくなる青木や榊等の本物の木々が根付いており、雑草なども出て来ておりました。なかなか、その土地本来の本物の木々が出て来て再生することは、誠に難しいことなのです。しかし、我々は、今、その土地本来の本物の植生があるというのが、いかに少なくなっているのかということや、贗物が横行しており、贗物を本物と思って大いに使った場合は、不幸な影響を及ぼすことになるかも知れません。「本物とは厳しい環境に耐えて長持ちするもので、そして50年・100年・1000年・9000年も残るものであります。そういう森作りを、是非皆様とともにしたいものであります。へたをすれば、「セメント砂漠」という「死んだ材料」で高層建築は作られて行きますが、そこで住まされている我々自身は、どんなに科学技術を発展させても、どんなに株で儲け大きな財産や不動産を持ったとしても、もう今日お見えになっている方々は、命は100年も持ちません。何を残すのか？30数億年前に、数ある星の中で、たった一つ地球という小さな星に誕生した原始の小さな生命が生まれました。その細い遺伝子を連綿と今日まで切れずに繋いで来たからこそ、今日の我々がある訳です。皆様が未来に残すべきものとは、金でも財産でもありません。そのかけがえの無いあなたのあなたの愛する人の、三十数億年続いてきたこの世に生まれた命からの生命の遺伝子が連綿と繋がり、それこそ未来に残して行くべきものなのであります。切り札として100年足らずのここにおられる方々の遺伝子の未来の命の証として、あなたとたの愛する人の

遺伝子の芝生の三十倍の緑の表面積があったら「故郷の木による故郷の森」であります。それは、「鎮守の森」であります。「鎮守の森」を見れば、我々の先達はいろいろな木を植えたかも知れない。しかし、土地に残る木は、必ず自然により淘汰され、台風や地震や火事といった自然災害にあって消えてゆき、跡に残るのは限りなく自然に近くなってゆき、この明治神宮に象徴されているのであります。未来に残し生きる為には、今の情報社会では、子供達も物心のつくころから、いつでもリセットされる中で生き、架空のヴァーチャルな仮想空間で育っています。熟年者と言われる皆様も、ついついその日その日の情報過多の会社も社会や政府も地方公共団体も職場や学校も家庭も、未来に対して希望も夢も確たる目標を示していない。従って、未来にたいする不安、心理的な不満やガセネタ(贋物)と本物の区別が出来ていない、これ程人類がかつて無かった程の繁栄と豊かさを享受していながら、魂のあり方に問題があり、親が子を殺したり子が親を殺めたりといった、命を粗末にする風潮が横行しています。生命がこの地球に出現してから35億年、人類が出現したのが僅か500万年前のことで、連綿と続いてきた命の遺伝子の連鎖の中で、1万年前までの499万年は、人類は森の中で当時の恐竜や肉食性の外敵やマンモスなどから身を守り、森林のお蔭で身を守ってきた歴史があります。今、素晴らしい科学技術の発達で豊かになってはおりますが、9000年の人類の歴史の中で縄文時代が長く、瞬きする一瞬のようなここ数十年の間に急激な気候大変動に直面しているという訳です。人類は、臨終の直前に瞬間的に蠟燭の火が燃え上がって輝くというように、エコロジカルには目覚める状態にあるとも言えます。我々は、帝国劇場や歌舞伎座で近松門左衛門の芝居を見るよう心中の場面を見ていても、自分は劇場の冷暖房完備の快適な環境の中で人の死には、劇中のドラマの主人公達の悲劇と比較して幸福感を味わっているのかも知れないのですが、いざ自分が死ぬとは死の瞬間まで思っていないのです。生物というものは、皆、その死の瞬間まで己れの死には気付かないものであります。しかし、どんなに科学技術が発達してみても、死んだものを生き返らせることは、虫一匹、雑草一本、不可能であります。現代の科学技術の力をもってすれば、死んだ材料で月にまで到達させることは出来るかも知れないが、命に対してはそれに取り組む環境はなくどれ程不十分であるかを知っていただきたい。科学技術の発達の限界を知っていただきたい。もしも本当に科学技術が発達しているのなら、地球上の66億人の全世界の人々のうちで、100年以上1000年はおろか300年、150年という寿命がある人が一人ぐらいい居ても良さそうなものですが、どんなにしても、そのように人の命を長らえさせることは出来ません。そうしたことから、一番かけがえのない、あなたの、あなたが繋げる人の命を未来に繋げる為に、遺伝子を、人間しか持っていない知性を感性を文化を続ける為に、今すぐどこでも誰でも出来ることがあります。それは、今しがた、NPO法人地球緑化推進機構の理事長の佐宗邦夫さんがお話されましたように、台風の巨大化等に見られるように、「自然の脅威」ともなりつつある「地球温暖化の問題」に取り組むことであります。人間は、未来に向かって生き続けなければいけない。どれ程科学技術が発達していても、皆さんは、この地球に生きていく限り、生物学的に言えば「緑の植物の成長の立場」でしか生きてはいけません。その為には、身近なところから、その土地本来の本物の木を植えていくこと、すなわち、日本人が造成してきた芝生の30倍ある土地に「その土地本来の故郷の木による故郷の森」すなわち「鎮守の森」が、急速に失われて来ている現在、その保全と復活に努めることであります。例えば、神奈川県では、東京に次いで発展して800万人をも超える人口増加により、乱開発で、かつては2864か所もあった「鎮守の森」が、現在は僅か40か所程度しか残

っていないのです。こうした趨勢の中で、このような中で思うこととは、この日本人が最後に本格的に都市化がもっとも進んだ東京のど真ん中に作ったこの「いのちの森」、この講演会場の「明治神宮の森」のように、このような森が、僅か「幅 1 メーターのテクノロジ」で出来る訳なのですから、皆様のネットワークを繋いでいって、私たちの子供達の未来の為に対応して作っていくことこそが、今すぐどこでも誰でも出来るやるべきことなのです。

これから、僅かの限られた時間ではありますが、スライド写真映像によって、これ迄私が 58 年間に、国内・世界 38 か国の土地を自らの足で調べ、35 年間に 1600 か所以上の地で、日本国内・ボルネオ・アマゾン・中国・モンゴル・ケニアまで行っておこなってきた植林の成果の映像を 1 万数千枚のスライド写真の中からお見せして、映像を通して皆様と一緒に考えて参りたいと思います。

以下の映像解説は、省略。

- 詳細をお知りになりたい方は、インターネット会員にご加入戴き、サイトのダウンロード 又は DVD をお求め下さい。

以下の 第 部 命のチカラ 省略

第 部 命のチカラ

- | | | |
|------|--|-------|
| 講演 2 | 鎮守の杜でセロトニン神経を鍛えよう
東邦大学医学部教授・医師 | 有田秀穂 |
| 講演 3 | がんワクチン - 自然治癒力をやさしく引き出す -
米国蓮見国際研究財団理事長 | 蓮見賢一郎 |
| 終言 | 「 悠久の大宇宙の波濤としてのわれら 」
NPO 免疫療法懇談会 理事長 | 酒生文弥 |

詳細をお知りになりたい方は、インターネット会員向けにご加入戴き、サイトのダウンロード 又は DVD をお求め下さい。